

教員・保育者を希望する学生のグループ芸術 療法体験の効果の検討 —詩歌制作体験を通して—

Examination of the effects of group art therapy experience for students who wish to be teachers and childcare workers. -Through the poetry production experience-

毛利 泰 剛

Yasutaka Mohri

I. 問題と目的

共感的理解の資質の獲得

今日の教育・保育実践において発達相談・教育相談の果たす役割は大きくなっている。様々な課題を抱える子どもたちやその保護者に対応するため、教員や保育者にはカウンセリング的な資質が必要と考えられている(浅見, 2000)。

福岡女学院大学人間関係学部においても、「発達教育相談の基礎」や「教育相談の方法と実践」といった講義が設定され、相談の理論や技法を学ぶ機会が準備されている。特に共感的理解といった相談の資質や技術の習得は今日の保育者及び教育者にとっては必要なものであるといえる。しかし、共感的理解をはじめとする、共感という人の感情に関する資質は他の教科教育や知識習得の学びとも違い、講義形式の授業や研修では実感が湧きにくい。そのため、共感的理解と一言で言ってもそれを実感し、それが何かというものを学生に理解してもらうのは相談関係の学びの一つの課題であるといえる。特に教員・保育者養成課程においては、心理士養成課程と比較して相談に関する学習時間は少ない。臨床実践や心理学の知識背景も多くはない中で、共感的理解を学んでいくことはかなり難しいということがいえる。では教員や保育者に必要な力の一つである共感的理解について、どのように習得をしていけばいいのであろうか。

教員や保育者が主に共感的理解の資質を求められる

のは現場の子どもたちやその保護者に対して関わるときである。子どもたちに対して共感的理解を行っていくためには、何より子どもたちを受容し、理解することが必要である。津守(1979)は保育者、教師が子どもに接する態度について「教師の心の中にあるさまざまな感情や悩みが受容されて、はじめて客観的にみることができるようになる」と述べている。そこで共感的な理解を進めていくには、まず自分のことについての客観的な受容である自己理解が必要であると考えられる。

自己理解を促進するための方法の一つとして、心理療法や心理検査の体験が挙げられる。もちろん実際にカウンセリングを行うわけではないし、心理臨床的效果を求めるものではない。しかし、投影法を体験したり、心理検査等の結果から自分について考えたりして、自己を振りかえる機会を作ることによって、自己理解の促進を期待できる。それらが期待できる心理療法の体験の一つに芸術療法を用いる方法がある。

芸術療法とグループワーク

芸術療法とは様々な芸術作品を創造する活動に従事することを通じて、心身の健康を回復することを目的とした心理療法全般のことである(心理学辞典, 1999)。芸術「療法」というだけあって、主に心理臨床、心理療法の一つとして用いられるものだが、もともとは作品を創造する活動であるため、誰でもその活動を体験してみることは可能である。作品の創造や制作を通して、自己の内的世界が動かされるため、予防的カウンセリングをはじめ、共感的理解や自己理解を促進

する一つの方法として活用されていることも多い。

実際、保育において芸術療法は保育実践や保育者の研修をはじめとして、様々な応用が検討されている。

芸術療法を活用した応用の中で、自己理解を含めた共感的理解の習得するにあたってはグループワークが一つの有効な手段であると考えられる。例えば、稲場（2015）によれば、グループワークにおける保育者の体験過程について検証している。体験過程とは感じられるものであり、言語で表現されるようなものとは異なり、人がこの瞬間において感じることである（Gendlin,E.T,1964）。稲場（2015）によれば、保育者は自分が「気づく」「考える」ことを専門性としており、グループワークによって他者の考えを知ることにより、自分の「気づく」「考える」体験過程が生じることがわかるとしている。

芸術療法とグループワークの実際例として、安立（2016）は芸術療法をベースとした自己理解や自己表現の促進を目的としたグループワークを行いつつ、それをキャリア発達支援とのつながりを目指したプログラムについて検証している。

また、心理療法や芸術療法に関する体験的グループワークの一つとして箱庭制作やコラージュ制作が考えられる。春日（2014）は箱庭制作やその制作過程の見守りによって、学生の自己理解や他者への共感的理解を促すことに繋がることを明らかにしている。

ただグループによる箱庭制作やコラージュ制作を考えたとき、砂箱や玩具、コラージュといった媒介物を共有する必要がある。また少人数での制作・交流は比較的容易であるが、共有するものが一つの媒介物であるため、大人数の場合、人数の調整や一斉に行うための時間や道具が必要になってくる。特に2020年は感染防止の対策もあり、触れ合いが生じるワークの実施は難しいという現状もある。そこで今回は芸術療法の中でも言語を媒介として交流を行う詩歌療法を取り上げる。詩歌療法の体験を連句形式で行うことで芸術療法体験の効果を検討する。連句は言語により句を歌い、それを共有していくものであるため、直接触れる媒介は必要とせず、人と人の距離を空けても実施可能である。

もともと連句をはじめとする詩歌療法は poetry therapy を飯森が訳したものであり（飯森, 1998）、

飯森(1978)をはじめとして医療領域やデイケアといった集団活動において、芸術療法の一つとして活用されている。また浅野（1986）、星野（1986）、田村（1988）らは連句療法として句を媒介としたグループエンカウターの可能性についても示唆しており、箱庭制作やコラージュ制作といった他の芸術療法によるグループワークと同じような効果が期待できるのではないかと予想される。

本研究の目的

本研究ではグループによる芸術療法体験の一つとして詩歌療法を取り上げ、詩歌療法の一つである連句制作を体験する。連句制作によるグループ体験が教員・保育者を希望する学生にどのような体験過程をもたらすのかを実際の学生の作品や感想から検討する。

Ⅱ. 方法

調査対象 大学3年生 77名（全員女性）

グループワークによる体験のため、1グループ3～6名によるランダムグループで連句を行った。そのうち、研究への同意を得られなかった学生の所属するグループを除いた77名、18グループを研究対象とした。

調査時期 2020年11月

調査方法 事前に3～6名のランダムグループを設定した。詩歌は連句の形として、「五七五」と「七七」を3回ずつ、メンバーで順番に詠んでいく形とした。また初めての体験であることも考慮して、最初の句はテーマとして秋を設定して句を詠んでもらった。それ以降は前句のインスピレーションを受けて詠むという形で行った。なお、グループによる連句という点から季語等については問わない形とした。連句が完成した後、自分のグループの連句を改めて読んでみての感想を個人で記入してもらった。

倫理的配慮 講義内での実施であるため、心理療法体験自体の目的として心理療法の効果を得るためのものではないことを説明し、体験においていろいろなことを考えたり、感じたりするのは自由であるが、自己の内面等の表現については、人に公表できる範囲で表現するように注意した。

また事前に研究内容を紙面・口頭で説明し、研究に対

する同意書を記入してもらった。提出してもらった作品や感想は成績評価等には一切含まれないことを明示したうえで記入してもらった。なお、本調査は福岡女学院大学倫理委員会の倫理審査の承認を受けて実施した。

Ⅲ. 結果と考察

1. 作成した連句作品について

完成した18の連句についてそれぞれのグループでテーマを設定してもらった。食欲や食べ物「食」というようにそれぞれのテーマをそれぞれのカテゴリーごとに集約した。その結果、「食」「自己」「風景」「学校」「空想」の5つに分類された。また設定したテーマ以外にも5つの分類のいずれかに当てはまる場合、最も当てはまるテーマを追加テーマとした。

図1はそれぞれの連句がどのテーマについてなのかをまとめたものである。このことから食に関する連句が圧倒的に多いことがわかる。以下の連句①は「食」をテーマにした連句の一例である。

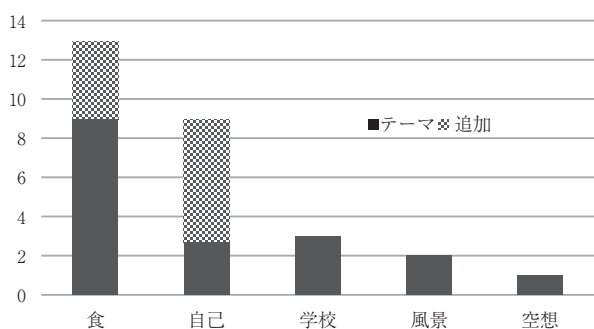


図1 連句のテーマ

連句①

美味しいな 秋刀魚も栗も 旬だよ
 体力つけよう いっぱい食べて
 何が好き? バランスもちゃんと 考えよう
 私は好きよ 海鮮丼が
 海鮮丼 鮭は好きだが ウニ苦手
 外は黒いが 中身は黄色

「秋」という課題設定から「食欲の秋」を想像したこともあるだろうが、学生は「食」に関心が高いということがわかる。好きな食べ物を聞きつつも、自分たちの好みを表現するという自己表現をしている。その意味ではこのグループはテーマとして設定していな

いが、「自己」というテーマがついてもおかしくない。海鮮丼という相手の好みに同意しながらも、自分の苦手なウニを表現し、最後の句ではウニの色を表現する繋がりをしており、相手の自己表現を否定せずに受け入れている状況も伺える。

続いては「自己」のテーマについてである。このテーマの特徴として、最初のテーマとしては「食」に関することが多いが、追加テーマとして「自己」に触れていることが多い。以下の連句②は、「食」と「自己」の追加テーマが設定された連句である。

連句②

もうだめだ 食欲の秋 食べ過ぎる
 ダイエットだ そんなの無理だ
 無理じゃない 明日やるうは バカやるう
 まだくじけるな やせてみせるぞ
 ありのまま 受け入れることも 大事だね
 あきらめよう 明日から食べよう

作成の場面においても、食への関心とそれに伴う自己の悩みをお互い楽しく言い合う様子が伺えた。感想に「女子大生ならだれもがこの場面に出会ったことがある」とあるように、女子大生の身近なテーマが扱われているといえる。

例に挙げた二つの連句に限らず、多くの句にも当てはまるが、グループで一つの作品を作り上げるというよりも、お互い語り合うようなやり取りが見受けられるのが特徴である。詩歌療法には一人で作品を作成して自己を見つめる方法もあるが、グループでコミュニケーションを楽しむ形になることによって、お互いを理解しあうという他者理解の形もとれているのではないだろうか。

2. 感想についての分析

・分析手順とカテゴリーの生成

続いて連句制作の体験過程の分析を77名の感想を対象として行った。修正版GTA(木下, 2003)の手順を参考に「グループによる詩歌療法でどのような体験をしていたか」というテーマで分析した。具体的な手順としては、分析テーマに沿い、具体例から概念を生成した。概念を創る際には概念名、定義、具体例、

概念生成の検討メモを記した理論的メモからなる分析ワークシートを作成した。次に、分析ワークシートをもとに概念間の関係を検討し、カテゴリを生成した。その結果、20の概念と11のカテゴリを生成した。またカテゴリの相互の関係を検討した結果、3つのコアカテゴリを生成した。このコアカテゴリは、連句制作の体験の中核となるものと位置づけられた。これらの一覧を表1～表4に示す。

表1 カテゴリ・概念リスト (コアカテゴリ・難しさ)

| カテゴリ | 概念 | 概念の定義 | 具体例 |
|--------|----------|------------------------|--|
| 連句の難しさ | 句の字数 | 句の字数について述べているもの | 五・七・五ではうまくできて、七・七では難しい場合もあった。五・七・五の次の七・七につなげるのは難しかったし、前々の句と異なるように作るのも難しかった。 |
| | 繋がりの難しさ | 文と文の繋がりについて述べているもの | なかなか思いつかなくて大変でした。前の人の句を聞いて作るのには難しいなと思いました。前の人が作った文に関連して考えるのは、とても頭を使いました。 |
| 思いつかない | 思いつかない | 句や句の言葉が出てこないことを述べているもの | はじめはなかなか思いつかなかったけれど、後半になるにつれて、一つのストーリーが見えてきて色々な句が出てきた。思うように言葉がでてこずに焦りました。 |
| 内容の変化 | 言葉の変化 | 言葉の変化について述べているもの | 五七五や七七の中の一つのワードで方向が変わって行ってワード選びも大切だなって思いました。最初と最後で言っていることが違うけど、通してみたら意味がつながっていて感動した。 |
| | 話の繋がりが無い | 句の内容について述べているもの | 途中の句が、話が繋がっていないのが不思議な感じがした。 |

表2 カテゴリ・概念リスト (コアカテゴリ・達成感)

| カテゴリ | 概念 | 概念の定義 | 具体例 |
|--------|--------|---------------------|--|
| 満足感 | 繋がりの良さ | 繋がり感について述べているもの | 五・七・五と七・七が繋がったときは気持ちよかったです。前の人のインスピレーションを受けつぎながら作ったので、なんとなく繋がっているような句になりました。 |
| | 流れの良さ | 連句の流れの良さについて述べているもの | 短い言葉でつなげていくことで流れが分かりやすかった。 |
| | 完成の喜び | 完成したものを肯定的にとらえているもの | みんなで考えた句が一つの連句になっていて、最後の句がいい感じに終えることができた。できたときは嬉しかったし、盛り上がりました。 |
| 遊戯性 | 楽しい | 楽しさを述べているもの | 他の人の句がかわいくてきいていて楽しかったです。 |
| | 面白い | 面白さについて述べているもの | 連想ゲームみたいで自分の思っていたのとは違う方向性のワードや話の展開があって面白かったです。字余りなど久々に懐かしい単語が出てきて面白かった。 |
| ストーリー性 | 話の変化 | 話の展開について述べているもの | 3番目くらいからストーリー性があってよかったです。最初からストーリー性があるともっとおもしろそうだなと思いました。はじめの方は「恋」には全く関係がなかったのに、最後に向かうにつれて恋愛要素が強くなり、キラキラした印象になるように思えて感動しました。 |

表3 カテゴリー・概念リスト（コアカテゴリー・グループ）

| カテゴリー | 概念 | 概念の定義 | 具体例 |
|-------|-------------|------------------------|---|
| 意欲の向上 | みんなで作った感覚 | みんなで作ったことについて述べているもの | 皆で意見を出しながら考えたのでとても達成感を感じました。みんながつかないでいった連句が完成したとき、みんなで作った達成感があり、なんかうれしかったです。みんなで作ったというものなので思い出に残る。 |
| | またやりたい | またやってみたいと述べているもの | 今度は妹たちとやってみたいと思いました。またみんなでやってみたい。 |
| 他者の存在 | 自分との違い | 自分との違いについて述べているもの | 自分だったら、こう言うと思うものがあったら、全くちがうことができたりして、考えの幅があり、面白かった。 |
| | 他者のイメージや価値観 | 他者のイメージや価値観について述べているもの | その人の頭の中のイメージや価値観がわかったと思った。 |
| 共有・協力 | 一人ではない良さ | 一人との違いについて述べているもの | 連句は確かに難しく感じていましたが、一人一人に与えられた場所が決まっていることで、一人で作るときの心の重さはあまりないなと思いました。一人で考えていたらこのような結果にはならなかったらうなという気持ちで、まさに十人十色だなと思いました。俳句は一人で作って終わりというイメージが強かったけど、連句はグループの人と協力して作り上げたのでとても楽しかったです。 |
| | 恥ずかしさ | 恥ずかしさや照れについて述べているもの | 自分の思ったことを表現して、それを他人に共有するのは少し勇気が必要で、恥ずかしかった。最初は少し照れくさかった。 |

表4 カテゴリー・概念リスト（コアカテゴリー・その他）

| カテゴリー | 概念 | 概念の定義 | 具体例 |
|--------|--------|----------------------|--|
| 句の振り返り | 食への関心 | 食への関心について述べているもの | 女子は食欲の秋に勝てないんだなと思った。前の人に影響されて、食べ物ばかりになっているなと思いました。食べ物のことばかり考えているのかな？と思いました。初めの「いも」にとっても引っ張られて全部関連してしまいました。 |
| | 自己について | 自己について述べている | 女子大生ならだれもがこの場面に出会ったことがあるなと自分たちでもびっくりしてしまいました。句につなげて生活と関連づけて考えてみました。私たちがしくていいと思った。女子はみんなキュンを求めている。 |
| 次回の構想 | 次回の構想 | 次回の行う場合の案について述べているもの | ひとつ前の人しかわからないようにするともっと面白い連句になっていたかもしれないなと思いました。もっと変なのがあってもよさそうだなと思った。次はもっとつながりを意識したい。 |

・グループによる連句制作の体験過程の説明

図2で示したグループによる連句制作の体験過程をストーリーラインとして文章で説明する。(《 》はコアカテゴリー、< >はカテゴリー、【 】は概念を表すこととする。)

連句は学生にとって《難しさ》を感じるものであった。《難しさ》の要因として、【句の字数】や【繋がり難しさ】といった普段意識しない形式である<連句の難しさ>を体験しているからであった。その字数に合った言葉が<思いつかない>ため、句によって【言葉の変化】が起こったり、【話の繋がらない】状態に陥ったりという《難しさ》があった。

しかし、《難しさ》を乗り越えて、連句を完成させると《達成感》が得られるものとなった。《達成感》が得られる要因として、連句を完成させたことによる<満足感>、連句の<ストーリー性>、<遊戯性>が挙げられた。<満足感>は句の【完成の喜び】を得られたこと、《難しさ》を感じていた句の制作に【繋がり難しさ】や【流れの良さ】を<句の振り返り>を行うことによって、感じ取れた充実感があった。<ストーリー性>は、完成した句を詠み返すとそこに【話の変化】や展開があったこと、<遊戯性>は句を作ることや<ストーリー性>によって【楽しい】気持ちになり、【面白い】と感じたことであった。

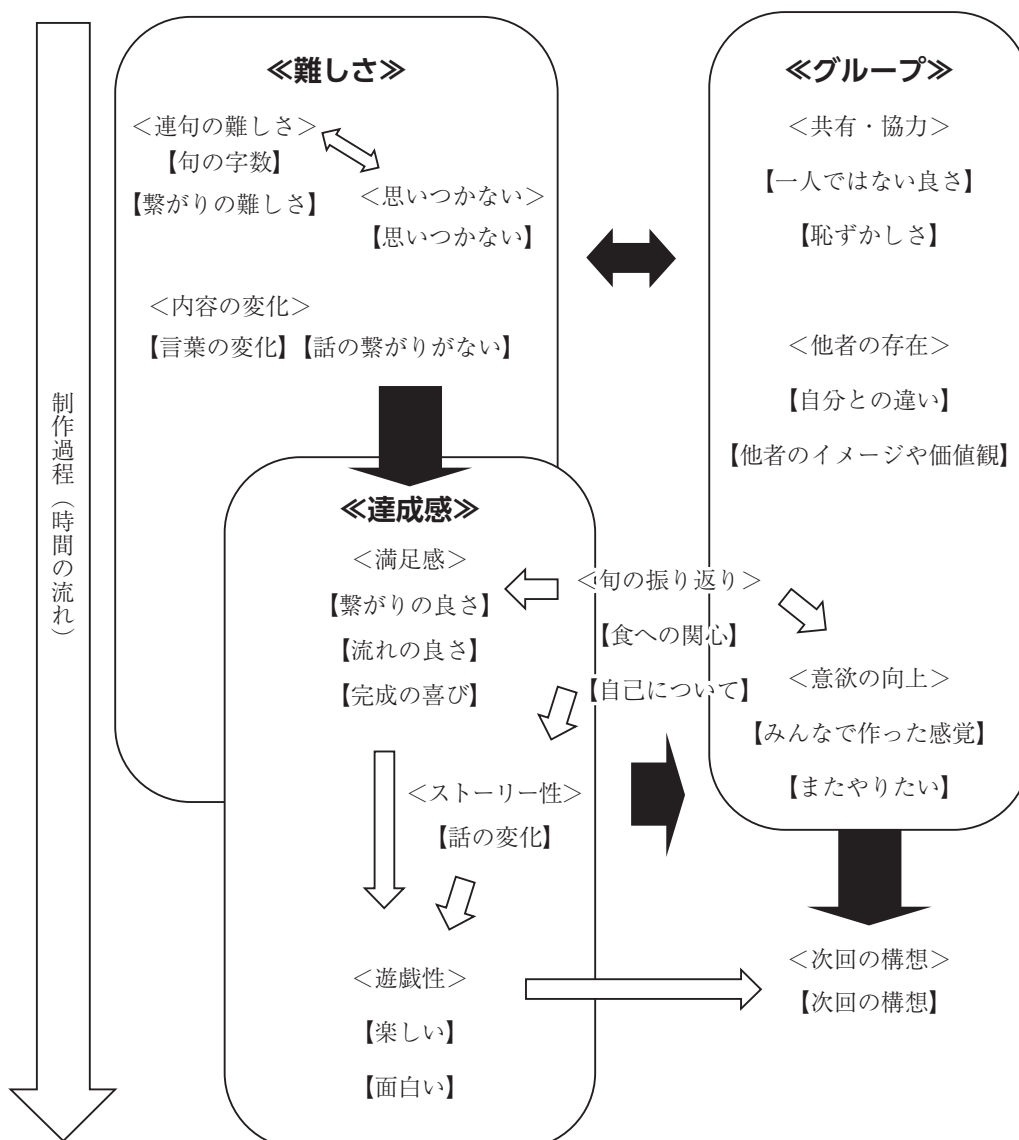


図2 グループによる連句制作の体験過程モデル

連句の《難しさ》や《達成感》を感じた背景には《グループ》による活動が影響していた。連句を＜共有・協力＞して創作することで、【恥ずかしさ】を感じることもあれば、【一人ではない良さ】を感じることもあった。それは＜他者の存在＞を感じることもであり、句を作ることによって【自分との違い】を感じたり、【他者のイメージや価値観】を知る機会にもなったりした。また、連句は【みんなで作った感覚】が残るものであり、【またやりたい】という＜意欲の向上＞に繋がるものであった。

・ 連句をグループで体験する意味

連句には独特の《難しさ》がある。教員・保育者を目指す学生が、国語などで俳句の知識は学んでいても、特に普段の生活で詩歌や俳句に触れることはあまり多

くない。しかし、谷川（2000）によれば、短歌や俳句をたしなんでいる日本人は数百万人を超えるといわれており、決して身近ではないものではない。また、五・七・五といった【句の字数】や【繋がり難しさ】といった《難しさ》は、その制限や課題をクリアしていく点において、クイズやパズルと似たようなものと考えることができる。簡単な作業ではなく、その《難しさ》を乗り越えることによって、＜満足感＞や【楽しい】、【面白い】を得られるのであるといえる。

ただ句を作る難しさだけであれば、一人での創作活動であっても一定の＜満足感＞は得られるかもしれない。今回はグループでの連句を行ったこともあって、自分にはない＜ストーリー性＞を楽しむことができ、【楽しい】気持ちや【面白さ】を感じる＜遊戯性＞の要素

が強くなった体験だったといえる。

グループ活動では〈共有・協力〉を体験することであり、特に句の創作は言語で自己を表現する活動である。自分を他者に理解してもらうということは自己をさらけ出すということでもあり、お互いが相手を受け入れる関係が必要になってくる。春日（2014）の箱庭制作においても、制作による「被受容体験」と「見守る体験」が他者理解、他者を配慮しようとする気持ちを促進させたと分析している。今回の連句制作でも同様な体験が生じており、〈他者の存在〉を意識することによって、より相手の立場を理解しやすくなっていると考えられる。

・連句制作の特徴

三宅（2009）は教員養成課程におけるカウンセリング実習に交互色彩分割法を活用している。交互色彩分割法を活用する意味として、①自己理解を深める、②コミュニケーションの振り返り、③他者との出会いという視点から今後の自分が取り組むべき課題を捉える、という3点について述べている。

今回の連句制作についても、同様の効果が考えられる。まず①の自己理解を深める点については、句を創作するという点で自己を表現するという作業そのものを行っており、〈句の振り返り〉を行うことによってさらに自己理解を深めている。②コミュニケーションの振り返りは先述した《グループ》での体験活動の意味そのものである。③他者との出会いという視点から今後の自分が取り組む課題を捉えるという点においては、連句を作ることで【自分との違い】を感じ、【他者のイメージや価値観】を知る機会ができ、その相手とどのように連句を完成させるのかという【繋がり難しさ】という課題が出来上がる。このような点において、芸術療法における描画法とも多くの点において共通していることがわかる。また描画法では「枠」という点も重視される。「枠」は相手の世界をしっかりと引き受けるためにも重要な制限であり、連句においては五・七・五、七・七という【句の字数】という設定がある。今回は設定しなかったが、「季語」も一つの「枠」といえるだろう。人はどんな人間関係でもそれぞれの枠で関わっており、自分は人にどのような枠を提供できるのか、自分は人から与えられる枠をどのように感じるのかについて、《難しさ》を感じるものであるが、

それについて考えることは教員・保育者を指す学生にとって重要なことであるといえる。

次に、交互色彩分割法と連句制作との違いを考えたとき、交互色彩分割法のような描画法は描画という絵を媒体としたグループワークである。描画のやり取りは基本的に言葉を使わずに交流することができ、三宅（2009）は無言で実施する一つの理由について、「分かりにくい曖昧な情報を捨ててしまわずに大切に扱う体験をさせたかった」と説明している。私たちは普段、言語を用いてコミュニケーションをしているが、カウンセリングをはじめとする、相手を理解し、受容することにおいては表情やしぐさといった非言語の情報を読み取る力も必要である。連句制作は言語を媒体する芸術療法であり、この点についての体験はできていない可能性が高い。一方で、言語そのものに「枠」を掛けていることから、制限された中での言語コミュニケーション能力を高めることができるのではないかと考えられる。大事なことになる多弁になったり、あまり関係のない話をあえてしようとする人も存在するが、そのような人は言葉を防衛として使用している。大事なことからこそ、相手に簡潔に言葉で伝える力も教員・保育者には必要な資質であるといえる。連句制作はその点において、描画法をはじめとする芸術療法とは違った可能性を持っていると考えられる。

IV. 総合考察

本稿では、詩歌療法の一つである連句制作のグループ体験が教員・保育者を希望する学生にどのような体験過程をもたらすのかを実際の学生の作品や感想から検討した。

連句制作体験は作品自体からも学生の感想の分析からも、学生同士による活発な言語コミュニケーションがみられる。芸術療法は絵画や箱庭など主に非言語による体験的コミュニケーションが行われることが多いが、連句や詩歌といった言葉によるものは言語的コミュニケーションによる体験が可能になるのも一つの特徴であるといえる。

平宮（2010）は詩歌療法、poetry therapyの現状について論じる中で、日本のカウンセリング場面においては構成的グループエンカウンター目的であるふれあ

いと自他発見のために詩歌が活用されると述べている。言語によるコミュニケーションであるからこそ、ある程度の意識的な体験で心の動きを納めることができ、またグループでも共有しやすい題材であるといえる。だからこそ、連句制作はふれあいと自他の発見としてエンカウンターとしても活用できるメリットがあるといえる。

また、半田（2017）は芸術療法的保育実践について論じており、保育の受容的環境が持つ能動性が芸術療法的であると述べている。子どもの表現を否定せずそのまま受け止めるということが受動的であり、保育に必要な要素であるが、そのまま受け止めるということは保育者自身の価値観や方法論を変えざるを得ないという意味で能動的であるということである。今回の連句による詩歌療法も共感的理解を促す一つの方法であると同時に、他者を能動的に意識し、自己と他者に関わることができるという点において、芸術療法の特徴を持っていることがわかる。そして、言語的な交流だからこそ、比較的簡単にそして、意識的にグループで共有し、コミュニケーションを深めていく良さをもっているのではないだろうか。

引用文献

安立奈歩（2016）. 大学生の自己理解及び自己表現の促進を目的としたグループワークの効果に関する予備的検討－芸術療法とキャリア発達支援の橋渡しを目指して－. 椛山女学園大学研究論集, 第47号（人文科学編）, 1-6.

浅見均（2000）. 保育者の資質に関する一考察 保育現場から見た保育者の資質. 青山学院女子短期大学紀要, 121-150.

Gendlin,E.T.(1964). A Theory of personality change. In P.Worchel & D.Byrne (Eds), Personality Change. John Wiley,100-148. 村瀬孝雄（訳）(1966).

体験過程と心理療法. 牧書店.

半田結（2017）. 芸術療法的視点を取り入れた保育実践の可能性. 関西福祉大学紀要, 15-24.

浅野欣也（1986）. 連句療法の精神療法的意義. 芸術療法, 7-14.

平宮正志（2010）. 教育とカウンセリングの視点よりみた日本の詩歌の歴史的一考察－読書療法、詩歌療法、poetry therapyの起源と現状を列記して－. 二松学舎大学論集, 45-63.

星野恵則（1986）. 連句療法の経験－青年期境界例を中心に－. 芸術療法, 53-63.

飯森眞喜雄（1978）. 精神分裂病と詩歌 第1報：俳句を用いた慢性精神分裂病患者に対する精神療法的接近の試み. 芸術療法, 95-103.

飯森眞喜雄（1998）. 俳句・連句療法 三木善彦・黒木賢一（編）日本の芸術療法. 朱雀書房, pp167-196.

稲場健（2015）. グループワークにおける保育者の体験過程. 新潟青陵大学大学院臨床心理学研究, 57-67.

神村栄一（1999）. 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁榎算男・立花政夫・箱田裕司（編）. 心理学辞典. 有斐閣, p215.

春日由美（2014）. 教員・保育者を志望する学生のカウンセリング的資質の学びに関する一研究－箱庭制作を用いた共感的理解の学び－. 南九州大学人間発達研究, 13-22.

木下康仁(2003). グラウンテッド・セオリー・アプローチの実践 質的研究の誘い. 弘文堂.

三宅理子（2009）. 交互色彩分割法の活用の可能性－教員養成課程におけるカウンセリング実習への適用から－ 島根大学教育臨床総合研究, 8,101-112.

田村宏（1988）. 連句療法による躁うつ病の治療経験 芸術療法, 31-40.

谷川健一（2000）. うたと日本人. 講談社現代新書.

津守真（1979）. 子ども学のはじまり. フレーベル館.